

『ガリヴァ旅行記』における結婚・生殖・子女の教育について

— スウィフトの理想とガリヴァの境遇 —

山内 暁彦

序

ガリヴァはフウイヌム国からの帰国後に妻子と再会するが、彼は妻の姿に衝撃を受け卒倒してしまう。ヤファー＝人類と考えるガリヴァにとっては自分の妻すら一匹のヤファーであるに過ぎない。ガリヴァは自分がヤファーの雌との間に子を作ったことが大変なショックなのである。妻の名はメアリ。子は2人いる。名はジョニーとベティ。¹ ガリヴァはリリパットへ旅立つ前に結婚したことになっているが、『ガリヴァ旅行記』全編を通じて彼の妻や子供に関する記述は多くはない。ただし皆無という訳ではなくて、ガリヴァは、物語の「書き手」として数度にわたり妻子のことに言及してはいる。例えば、第2篇「プロブディンナグ渡航記」には以下のような記述が見える。

Being quite dispirited with Toil, and wholly overcome by Grief and Despair, I lay down between two Ridges, and heartily wished I might there end my Days. I bemoaned my desolate Widow, and Fatherless Children.²

ただ、こうした記述は、言わばその場限りの言及に過ぎず、それ自体にはあまり意味はないようである。即ち、『ガリヴァ旅行記』の真の作者スウィフトは、もとよりガリヴァと妻子の細やかな情愛などを描くことは目的としていない。物語の結末で、ヤファーの雌と結合してしまったという後悔の念をガリヴァに持たせられさえすれば良かったのであって、これ以外の妻子に関わる記述は、ガリヴァの卒倒の場面の前置きとしての役割だけを持っているのだと極論することさえ可能である。

作者スウィフトは、ガリヴァが独身者であるという設定を設けることも可能であったはずである。例えば、ロビンソン・クルーソーは独身であり、孤島での生活から帰ってからやっと結婚したことになっている。ガリヴァも同様の人生行路を歩んでも、何ら不自然なことはない。しかし、彼がもし結婚していな

かったら、帰国後の再会の場面は存在せず、従ってガリヴァは卒倒もせずに済んだということになってしまうだろう。これでは諷刺の効果という面において、現に作品として我々の目の前にあるものより見劣りするものになってしまうことだろう。ガリヴァが結婚していることは物語の結末を盛り上げる為には是非とも必要なことだったのである。

妻がいるという設定は便宜上のものであったために、妻メアリが一体どのような人物であるのか、ガリヴァが英国に戻っている間にはどのような夫婦生活が営まれていたかといった事柄はまったく作中には描かれていない。この点は、作品の不備と言うことはできないまでも、大方の読者はこのことを不満に思うのではないだろうか。それはとりわけ現代の読者にとって著しいことであろう。その不満を解決した事例として、最近の映画化された『ガリヴァ旅行記』を挙げることができる。³ この映画では、妻のメアリと子のトムは、全編にわたって出演しているだけでなく、最後の審問の場面では、ガリヴァを弁護したり、ガリヴァの話が真実であることの確かな証拠を提出したりして、ガリヴァの窮地を救う。⁴ 彼らはこの作品では決定的に重要な役割を果たしているのである。⁵ この作品の脚色は、家族の絆の回復という側面を重視したものであるが、ある程度成功を収めていると考えられる。その中心人物が妻メアリなのである。この例からも分かるように、原作の『ガリヴァ旅行記』では妻メアリの存在感が大変希薄であるという事実に着目すれば、原作にはない彼女の物語を新たに案出したくなる衝動にかられる者がいたとしても、それは大いに理解のできることである。

ところが、ガリヴァ個人の状況から作品全体へと目を転じてみると、結婚や生殖という問題、あるいはそこから連続して生じる、子女の教育という問題は、折に触れて出来てくることに気がつく。これらは、作品の基本的な主題の一つであると考えられるものである。『ガリヴァ旅行記』という作品が、ユートピアないし反ユートピアを描いた作品群に連なるものであるという観点から考えても、こうしたテーマは、現実の社会を批判するという意図が作者にある限りにおいて、避けて通ることのできないものであったに違いない。否、むしろ、このような、結婚・生殖・教育といったテーマを含んでいることこそ、『ガリヴァ旅行記』の属すジャンルは何であるのかということを決定する際の要因になる、と言うべきだろう。いずれにせよ、結婚・生殖・教育のテーマは、ガリヴァの訪れる様々な社会において様々な在り方で提示され、それらが全体として何らかのメッセージを読者に発していると考えて良いだろう。そして更にそれらの総和にガリヴァ個人の境遇を対比することで、新たな観点から

これらの主題に対して一定の見解が我々読み手に生じて来るという仕掛けが施されていると予想し得るのである。本論では、作品において言及される、結婚・生殖・子女の教育のテーマについて考察していきたい。

I

まず、リリパット（小人国）とプロブディンナグ（巨人国）の様子を検討してみよう。リリパットについてはガリヴァは特に1章を割いてこの国の制度の説明をしている。その中では、男女の教育の平等が、限定付きではあるものの、既実現されているということが注目に値する点である。しかし、この一方、子女の養育はすべて公共の手で行なわれ、教育への父母の関与は完全に否定されてしまっている。その理由付けはスウィフト特有の辛辣さとユーモアとを兼ね備えたものである。子作りの最中には両親は子供のことなど念頭になかったはずであるから教育の責任を彼らに負わせることはできない、というのである。これは単なる詭弁であるのだが、一見すると正しい考え方のようにも取れる、面白い考え方だ。芥川龍之介の「河童」で、生まれて来る子に、生まれてみたいかどうかを前もって外から尋ねるという記述があるが、かなり辛辣なユーモアのセンスを両者に見いだすことができる。

全体として、リリパットの結婚・生殖・教育に関わる制度や慣習は、17世紀から18世紀にかけてのイギリスないしヨーロッパの実情を踏まえ、それを多少なりとも理想的なものに見える方向へと修正したものと捉えることができる。リリパットの社会は全体としてかなり作者の「理想」が盛り込まれているものである。「リリパットのようなちっぽけな国でさえ英国より立派な制度が存在しているのだから、英国人達よ、少しは反省してみよ」という作者の意図は十分汲み取ることができるのではないだろうか。

リリパット国では制度の紹介という形で詳細な記述があったのに対して、ガリヴァが次に訪れるプロブディンナグ（巨人国）では、結婚その他の制度に関する記述は、まとまった分量では見当たらない。小人国でかなり詳しく扱った後であるということで、作者スウィフトはこのテーマの重複をあえて避けたようである。但し、これと関連づけられるものとして、女性の肉体に関わるいくつかの描写がある。その一つは、ガリヴァが最初に拾われて行った先の農家の乳母の乳房の描写であり、またもう一つは、ガリヴァがプロブディンナグの路上で目撃する女性の乞食の癩腫のできた乳房である。乳房は男性からみて女性の性的魅力をになう肉体の部位の一つであると考えられるが、上記の箇所でも描かれた乳房はそのようなものでは全くない。却って、生＝性の影の部分文字

どおり拡大して読者に見せつけているかのようなのである。⁶ プロブディンナグではイギリスあるいはヨーロッパの現状を、リリバットとは逆の方向へ、即ち、人間の肉体の持つ醜さやグロテスクさを拡大するという方向へ、描写を誇張してある。即ち、結婚や生殖の面に関しては、プロブディンナグには魅力を感じさせないような書かれ方になっているのである。

但し、子女の教育の面では少し事情が異なっている。ここで指摘しておきたいのはグラムダルクリッチの人柄である。彼女の優しく世話好きで少し悪戯っぽい面もある人柄にプロブディンナグの教育の成果が出ているとすれば、その制度は決して間違ったものとは言い難いということになる。もちろん一人の少女の出来不出来だけで一国の教育制度自体を推し量ることは無理であるし、彼女は単なる例外であるかも知れない。また、彼女の出身の農家の様子を思い起こしてみると、とても十分な教育的環境にあるとは言い難い。だが、そうであればなおさら、彼女のように性質の善良な娘には、教育によって更に理想的な女性に成長し得るという可能性はより大きなものになる。もちろん、「理想」とはこの場合も一義的に定め得るものではないにせよ、である。

リリバットとプロブディンナグをまとめて見た場合、結婚・生殖・教育のテーマに関しては、イギリスあるいはヨーロッパの当時の状況を土台にして、作者スウィフトの「理想」の一端をリリバットの制度に色濃く反映させる一方で、否定的な姿をプロブディンナグの人物（特に女性）の描写を通じて具体的に提示していると言うことができる。ただし、プロブディンナグの方では、我々が問題としているテーマに関する制度のまとまった分量の記述が欠けている為、それを論じようとしても、実際にははっきりとした断定はできないとも言える。実際のところ、プロブディンナグの結婚・生殖・教育の諸制度はどうなっているのかという点に関しては、我々は鋭意テキストの不足を補って行かねばならないことになるのである。

ここで、ガリヴァ自身の身の上に目を向けてみよう。我々は、巨人の国王によってガリヴァと同類の者（とりわけ雌）を是非とも捜し出すようにという命令が発せられた、ということをごここで考え合わせるべきだろう。ガリヴァは次のように述懐している。“[The King] was strongly bent to get me a Woman of my own Size, by whom I might propagate the Breed (p. 139).” ここプロブディンナグでは、ガリヴァは珍しい動物並みの扱いしか受けていないことになる。幸か不幸かガリヴァは「つがい」にされることはなかったが、巨人国の尺度では身の丈6インチ足らずのガリヴァがこのような扱いを受けてしまうことは、何ら驚くべきことではないものであるし、この部分

は第2篇の結末が近い所為もあって、比較的軽く読み飛ばされてしまいがちな箇所であろう。しかし、我々の扱っているテーマに関しては、かなり深刻な事態が生じていると言って良い。それは、簡単に言えば、結婚の神聖さの相対化ということである。人間の神聖な営みであるはずの結婚が、動物的なレベルに格下げされてしまっているということである。人生の大問題が、自らの力の及ばない状況で、いともたやすく左右されてしまう不条理が、ガリヴァの身の上には起りかねなかったのだ。しかし、良く考えてみれば、ガリヴァのこの境遇は決して稀なことではない。我々は誰しも「運命」の気ままにさらされて、いのように弄ばれているのだという考え方は、特に珍しいものではない。ガリヴァの場合はそれが多少極端な形で表現されているに過ぎないとも言える。「運命」に関する言及は作品の中に再三見いだせることから考えて、ガリヴァ自身もこの件について特に意識的になっていると解釈することもできるだろう。

ここで比較考察すべきは、1960年制作の映画『ガリヴァーの大冒険』である。⁷ この改作版では、プロブディンナグに流れ着いたガリヴァを待っていたのは誰だろう彼のフィアンセ、エリザベスその人なのだ。⁸ 彼女はガリヴァと同じ船で英国を出、ガリヴァがリリパットで一仕事している間に一足先にプロブディンナグに流れ着き、国王の庇護の下にあったという設定がなされているのである。再会したガリヴァとエリザベスは彼の地で目出度く結婚式を挙げ、夫婦として二人そろってプロブディンナグから脱出しイギリスに帰国するという運びとなる。こうした驚くべき筋書きを持つこの映画においては、スウィフトがせっかく蒔いておいたはずの、結婚の神聖さの相対化とか動物並みに格下げされてしまうことの危うさやはかなさといった種が、ご都合主義によって根こそぎ刈り取られてしまった観がある。ガリヴァと妻の扱い方に関しては、この映画は、もはや『ガリヴァ旅行記』とは言い難いものになってしまっていると言わざるを得ない。

II

さて、第3篇「ラピュタその他への渡航記」に目を転じると、ここにも我々の扱っているテーマに関連のある事柄がいくつも見いだせる。但し、それらは第2篇の場合と同様、まとまった分量で総体的に描かれることはなく、個々のエピソードの集積といった形で、ある一定の効果を読者の印象に対してもたらずという体のものだ。だが、この中には一読して忘れ難いものも含まれている。ラピュタ島の男達が思索に没頭している間、女性たちは叩き役を夫から遠ざけることによって愛人と仲良くし放題であるとか、島から一度離れて下界へ

行った女たちはなかなか戻って来ず、中には相当ひどい男のところに行ったりになる者もいるという。ここでの諷刺の対象は、女性一般に見られると信じられて来た、場合によっては男性を圧倒するその活力と、快楽への執着心であるということになる。結婚という形式が彼綻することは現実にはしばしば見られることであって、それを作品として描いたという点では、この箇所での諷刺は特に目新しいものではない。ただ、ラピュタ島の住人が全体としていかにも現実離れした形で描かれている中であって、この件に関しては現実の生活に大変密着した記述がされていることは事実であって、その故にこそ、女性に関する上記のような諷刺的な記述は、読者の印象によく残るものであると言える。

我々の扱っているテーマに深く関わる例をもう一つだけ挙げるとすれば、不死人間ストラルドブルグの生活の実態を解説する段において語られる彼らの結婚制度が挙げられるだろう。彼らは普通に結婚はするのであるが、若い方が80歳になるとその結婚は「解消」される、というのである。そしてその理由は以下のようなものである。

For the Law thinks it a reasonable Indulgence, that those who are condemned without any Fault of their own to a perpetual Continuance in the World, should not have their Misery doubled by the Load of a Wife. (p. 212)

キリスト教式の結婚式の中で結ばれる誓いの言葉の中に「死が2人を分かちまで云々」というよく知られたくだりがあるが、不死人間たちの間ではこの言葉の持つ神聖さは何の意味も持たない。むしろ、とめどない老化現象と共に永遠に生き続けねばならない彼らにとっては、もしこんな誓いをするとしたら、それは単に迷惑千万な制約であるに過ぎない。不死人間の結婚は、適当な頃合いを見計らって解消することが真に望ましいものなのである。このことは、不死人間たちの置かれた状況、つまり「不死」であるが「不老」ではないという状況をよく考えてみれば十分に納得のいくことではあるのだが、大方の読者にとって、そして恐らくキリスト教徒の読者にとっては特に、ガリヴァ＝スウィフトの何気ない語り口は、却って衝撃的なものとして受け止められたのではないだろうか。作者スウィフトとしては、歳は取っても夫婦が助け合って生活を続けて行くのだという設定を選択することも当然可能であっただろう。しかし実際に書かれた物語はそうなってはいない。ここでもまた、結婚という制度は絶対的なものとしては描かれていないと言えるだろう。

以上の二つの例で分かるのは、それぞれを異なる文脈で理解せねばならない

にせよ、結婚というものの否定的な側面に着目した記述であるということだ。第3篇を全体として捉えた場合、作者の結婚・生殖・教育についての考え方は総じて否定的であるようである。もし仮に作者がこのテーマをもっと深く追求しようと考えたのであれば、ラガードの企画士たちの研究の中にでもこれと関連したものを盛り込むこともできたのではないだろうか。それは、例えば不妊の治療法や、無痛分娩の方法などでも良かったであろうし、やがてスウィフトが書くことになる「控えめな提案」(A Modest Proposal)の試行版のようなものでも良かっただろう。だが、結局第3篇ではそのような記述はないままに終わっている。いくつかのエピソードに表されているものを除いて、この段階ではまだ、結婚・生殖・教育のテーマは目立った取り扱いは受けていないというのが実情である。

III

我々の扱っている結婚・生殖・教育のテーマについて、最大の重要性を持つのはやはりフウイヌム国の諸制度であるということになるであろう。リリバット国である程度「理想化」された形で描かれていた制度は、ここフウイヌム国で更に現実からの隔たりを大きく取ったものへと「改善」ないし「向上」させられている。

フウイヌムの間には友愛の精神が行きわたっていて、それは親子や夫婦や同胞についても他人と何ら変ることはないとされている。また、結婚の第一の目的は種の保存であるとされていて、夫婦の選択はすべて他人によって決められ、当人どうしの恋愛感情などの入る余地はない。人口を一定に保つ為、夫婦は2頭の子を産むとそれ以上の生殖行為はしない。このようにフウイヌムの結婚や生殖は、ひとえに彼らの「安定」した社会の存続に寄与するものであって、そこからは個人の情愛や熱情、あるいは異性の好みといった主観的な感情は完全に排除されてしまっている。

一方、ヤファーはこれとは全く対照的である。ガリヴァの水浴中の姿に発情したと思しき雌ヤファーの例を挙げるまでもなく、彼らは言わば「本能」剥き出しという態度で生=性を営んでいる。単純化して言えば、作者スウィフトは、人間が持っている(と想定される)「理性」と「本能」のそれぞれを個別にフウイヌムとヤファーに振り分けて双方の生物を新たに創造したと言うことができよう。従って、フウイヌムとヤファーを単独で見た場合、双方共に決して望ましい生き物には見えないというのも当然の帰結である。「理性」と「本能」の両者がバランス良く備わっていてこそ真に人間らしい生の営みが可能になるのだと

いうメッセージを読み取ることは、例え月並みな態度ではあっても、作品の解釈上、最も正当な方法の一つであるだろう。スウィフトは、ヤフーはもちろんフウイヌムの生活もまた全面的な賛同を得られるものとしては提示していないということ、基本的な了解事項としてここで改めて指摘しておきたい。

しかしながら、2頭目ができたらもう同衾しないというフウイヌムの制度は、当時のイギリスないしヨーロッパの社会の状況から見てある意味では羨むべきものであったのではないだろうか。現代の我々の判断の基準から考えれば、何という人権侵害の制度であろう、何と冷ややかで酷い社会だろうという感想は、必ずしも普遍的な判断とは成り得ないということを目指したいのである。17世紀から18世紀当時、劣悪な衛生状態や衛生観念の欠如から、性行為自体が苦痛を伴うものであったことや、アン女王の例に、極端な形ではあろうが、よく表われているように、子供が生まれても無事に成長すること自体、現代とは比較にならぬ程難しいことであったことを考え合わせれば、フウイヌムが3頭目を作ることはあまりないという記述は、当時の読者にとっては、無気味なことであるどころか、かなり羨むべき状況であったに違いないのである。Richard B. Schwartzによれば、当時は現代とは比較にならぬ程、悲惨な状態が一般的に見られたようである。

Bodies were unwashed and frequently verminous. Breath would be fetid from both stomach disorders and tooth decay. Eczema, scabs, and running sores were common, and there was always the likelihood of contracting venereal disease or the fear of unwanted pregnancy.⁹

この一節はあたかも『ガリヴァ旅行記』の中の一節でもあるかのようではないか。我々の持っている常識は必ずしも常に通用するとは限らない。作品の解釈をする際、時代背景が作品の内容に如何にして影響するものであるかということを見極めねばならないという、この当たり前のことは、『ガリヴァ旅行記』のような、人間の置かれた「現実」により密着した作品に接する際には、とりわけ大切なことであるのだ。

フウイヌムの教育について考える際も、彼らの結婚や生殖について考察する場合と同様の注意を払う必要がある。彼らの教育システムは一口で言って質実剛健なスパルタ式であるので、現代の感覚では潤いに乏しい不自由なものと映っても当然である。だが、これを一旦当時の英国、とりわけ作中でしばしば言及され批判の対象になっている貴族の子弟の教育の実情との対比で捉えてみ

ると、フウイヌムの青少年教育は「理想」以外の何者でもないことが分かる。フウイヌムの持つ制度や彼らの存在の在り方そのものを批判的に捕らえる論調は20世紀後半から顕著になってきたのであるが、個々の事例に即して解釈する限り、限定的ではあるものの、スウィフトの持っていた「理想」が、結局は色濃く反映されたものであると考えて大過ないのではないだろうか。その「理想」が我々の価値判断の基準に沿ったものであるかどうかはまた別の問題であるとしても。

結び

以上、結婚・生殖・子女の教育といった、ある意味では大方の人々が避けて通ることの難しい人生の階梯のいくつかに関する記述について考えながら、

『ガリヴァ旅行記』の第1篇から第4篇までを順に検討してきた訳だが、総じて作者スウィフトは、現実の世界にある状況を批判的に捉えることに立脚し、作品の中の架空の世界における様々な状況を案出し、絶えず読者に両者の相違を意識させつつ、ある場合は作者の「理想」を提示してそれに賛同させあるいは反発させ、またある場合には、現実の社会が持つグロテスクな面を拡大、誇張して表出し、読者に顔をそむけさせるという態度に出ているということが明らかになった。いずれの場合でも、読者は、自分自身や自分の周囲の人々が置かれた状況だけでなく、広く人類が置かれている状況をも、今一度顧みずにはいられないであろう。また、個々の記述について、それらが作者自身の「理想」を述べたものなのか否かを判断する際、読者は自分の「常識」にとらわれてはならないということが、重要な条件の一つであるということも分かった。

翻ってガリヴァ個人の境遇について考えてみると、彼は『旅行記』の「書き手」として、第4篇「フウイヌム国への渡航記」の記述を始めるに当たって、ということは即ち、フウイヌム国から英国に帰国してから数年の後、自らの『旅行記』の執筆に取り掛かり、第3篇までそれをしとげた後、ということだが、以下のように記している。

I CONTINUED at home with my Wife and Children about five Months in a very happy Condition, if I could have learned the Lesson of knowing when I was well. (p. 221)

ガリヴァは、自分の幸せな状態というものがどのようなものであるか分かっていたら良かったのに、と言っているかのようだ。これは後悔の念の表出ともとれる微妙な書き方である。結局のところ、ガリヴァはフウイヌムとヤフーに出

会うことで自らの結婚と2人（ないし3人）の子供を得たことを後悔するという、人間としてかなり悲惨な結末を迎えたのである。既述のように、ガリヴァは生涯独身であっても良かったのに、スウィフトはそのような設定はしていないのだ。スウィフトは作品の中で自らの「理想」を述べつつ、その一方で自らの創出した主人公ガリヴァの境遇をその理想とは程遠いものとしていることになる。これはひとえに、人類＝ヤフーという観念にとらわれ常軌を逸した態度に出たガリヴァを、作品全体の諷刺の効果を高める為の犠牲に供していることに他ならない。我々読者はガリヴァの境遇を気の毒に思い、それと同時に、結婚・生殖・子女の教育について本来のあるべき姿は一体どのようなものであるのかということについてももう一度思慮するように仕向けられることになるのだ。作品にはそれが如何なるものかは書かれていない。すべては読者の判断に委ねられている。

さて、ガリヴァは、結局、スウィフトによって悲惨な境遇に追い込まれてしまったことになるが、この後に一つだけ希望があるとすれば、それは、父親であるガリヴァの、悲惨でもあり滑稽でもある姿を見て育つであろう息子や娘の成長の具合がどのようなものであり得るのか、ということになるだろう。仮に、誰かの手によって『ガリヴァ旅行記』に「続編」ないし「後日譚」が書かれるとすれば、ガリヴァの遺児たちを中心にしたものとなっても決しておかしくはない。¹⁰ もしも彼らの「教育」が何かしらの「理想」を具体化したものとして描かれるとしたら、それは一体いかなるものとなり得るのか、想像してみても一興ではないだろうか。もちろん、その内容が本編の『ガリヴァ旅行記』以上に諷刺的なものとなるかどうか、我々読者に反省を迫るような問題を投げ掛けるものとなるかどうかは、予測できないことであろうとも。

註

¹ 第1篇の末尾で言及されている成人したと思しき2人の子供以外に、ガリヴァにもう1人子がいる可能性がある。彼が第4の航海に出かける時点で妻は妊娠中であったことになっているので、この子が無事生まれて育ったのであれば、子供の数は3人となる。ただしこの子の生死は定かではない。

² Jonathan Swift, *Gulliver's Travels*, vol. XI of *The Prose Writings of Jonathan Swift*, ed. Herbert Davis (Oxford: Basil Blackwell, 1965), p. 86. 以下『ガリヴァ旅行記』からの引用は全てこの版により、本文中の括弧内にページ数を記す。

³ *Gulliver's Travels*. Dir. Charles Sturridge. Hallmark Entertain-

ment Inc., 1996.

⁴ どういう訳か息子の名は、原作のジョニーからトマスに変えられている。あるいは映画のトムは、ガリヴァが出航した時に身重であった妻がガリヴァの不在中に産んだ子だという設定であるのだろうか。そうであるとする、彼の兄ジョニーと姉ベティーは本作には「出演」していないことになる。

⁵ この映画の評は以下のものを参照。Michael DePorte, "Novelizing the Travels: Simon Moore's Gulliver" *Swift Studies*, 12 (1997), 99-102.

⁶ プロプディンナグの物は我々のまわりの物の12倍の大きさであることになっているから、面積は144倍、体積は1728倍となる。従って醜い物も皆この比率で見ると迫ってくると思ってよい。

⁷ *The Three Worlds of Gulliver*. Dir. Jack Sher. Columbia Pictures, 1960.

⁸ どういう訳か妻の名は、原作のメアリからエリザベスに変えられている。エリザベス（ベティー）は原作では娘の名であったはずだ。この変更は、女性の名を持つイメージの違いを考える上で、興味深い例であると言えよう。

⁹ Richard B. Schwartz, *Daily Life in Johnson's London* (Madison, Wis. : The Univ. of Wisconsin Press, 1983), p. 140.

¹⁰ 『ガリヴァ旅行記』の「続編」のうち、ある程度の質の高さを持っているのではないかと目されるものとしては、以下のものが挙げられる。Matthew Hodgart, *A New Voyage to the Houhnhnms* (New York: Putnam's, 1970) ; Alison Fell, *The Mistress of Lilliput* (London: Transworld Publishers, 1999).